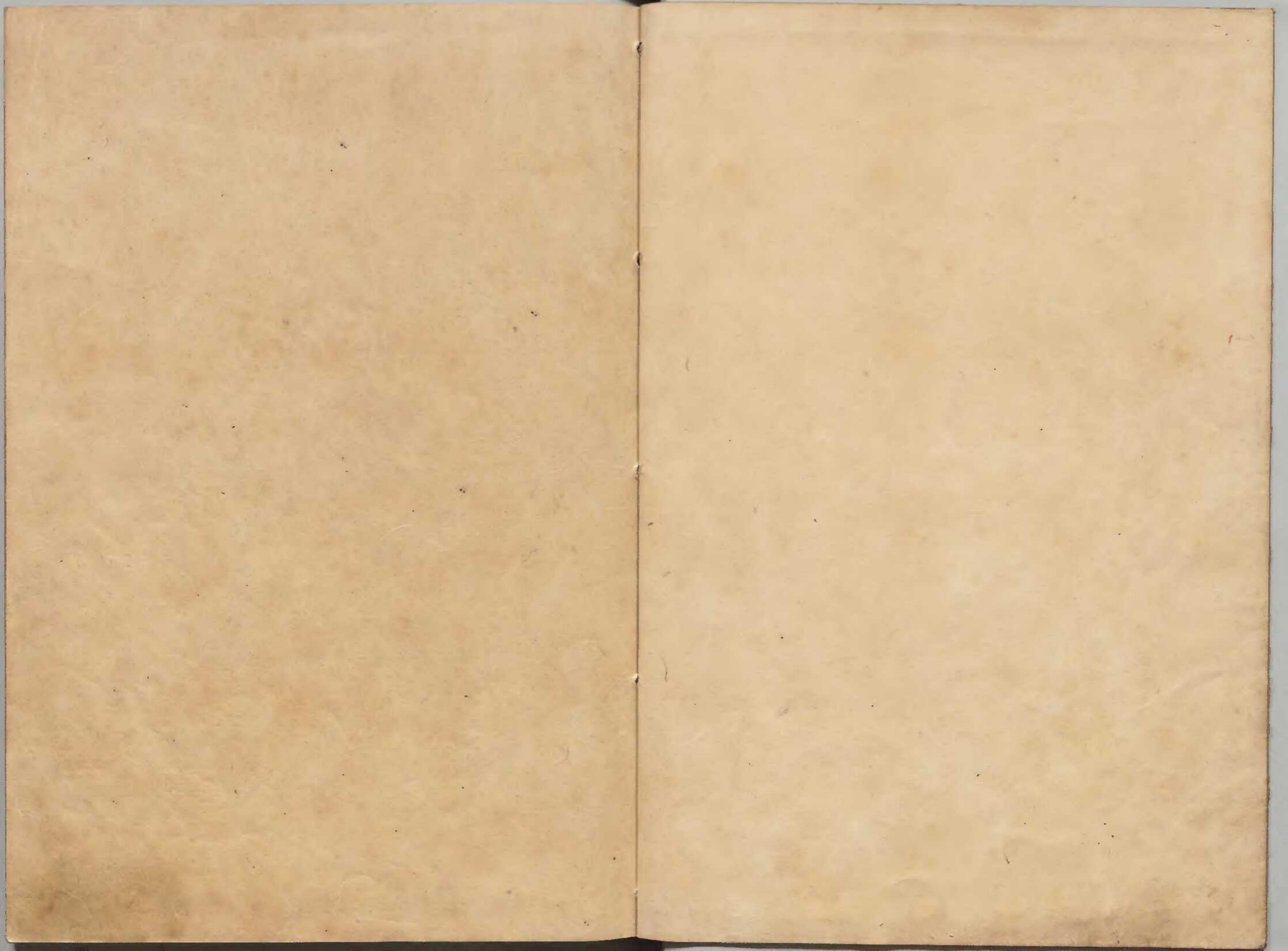


寛永諸家譜

平氏十九冊之内
支流

内閣文庫	
番號	和 20199
冊數	186 (79)
函號	76 1





若我	南條	原本	之井	編局
久我	飯塚	と原	佐治	川口

中絶の例あり

寛永諸家系圖傳

淺草文庫

平氏

支流

若我

今按と云ふ一伊藤井同流一若我
 あまはらと云ふ一原原なり流と云
 いま古祐木の棒雨一とらと皆
 復一と云ふ

祐信すけのぶ

左衛門

頼朝よりともより信のぶ

法守えいしゆ府ふ北將軍きたげん良文りやうぶん八代はちだい乃末源のすえんなり

祐信すけのぶより時助ときすけよりいづの家いづのいへまゝくは

五六代ごろうだいにけりる家傳けりるけだん紛失まがはしくは

いづりたゝと

時助ときすけ

國太郎

久明ひさあき親王のうぢより信のぶよりけり時とき小原こはら貞時さだときより下

乃な権けんと小原こはら

時とき

小次郎

守那もりな親王のうぢより信のぶよりけり時とき小原こはら高時たかとき

天下乃權と云ふ

仰助

右部右衛門 之野分

為成りしは下と文とつるなり
治別と田保關兩地と領と親連え
乃判然いしなりあや法名道行

氏助

小治部 英徳寺 兵庫助

義治しはふは時備中國淺井
郷乃内昌山丹波守あり所領の仕
至と治付らぬ貞治四年判然
是あり法名道昌

油助

右部 平次右衛門 英徳寺

右軍義油しはふは時備國

与田保の深茂とゆりし於永和四年
此判形これあり

政助 まさすけ

右衛門 平次重
將軍義満とよむ義持義量より
はより

友助 ともすけ

平次 ひらたけ 右衛門 みぎのり 上野女
將軍義教とよむ義政義高より

元助 もとすけ

又右衛門 右衛門 上野女
右軍義植とよむ義沈義晴より
う乃ら義沈浪人より
元助は守う乃右助より
感 か を 結 むす る こと あり

常主尚祐と行はり

東照大権現より言ひせし事

たげ。一じ是り

大権現尚祐が忠誠と感一を懐ひ

御書と尚祐より下り給ふ是あり

信雄と伴福共周りうらまひ

去りしひり者十四人尚祐より

うらありうら秀吉此命より

らく秀吉よりまゆとくとも

秀吉は生言一なすゆり

父助系が秀吉より言はる所

一舟は一月と送る

秀吉長女を此

大権現の御命よりうら武列

は

右徳院殿より言ふ

大久保相模守永井右近大守

治部もらたれり

同六年より

右徳院殿より行くまりる

寛永元年

右徳院殿より行くまりる

右軍家より行くまりる

同九年より死すまりる一六十九

右祐いさぎ

新にい之の節ふし

又また右みぎ之の節ふし

丹波たにのへ守まもり

享和長六年より

右徳院殿より行くまりる大坂

右及御陣より行くまりる

寛永八年より御使より行くまりる

同九年より

右軍家より行くまりる御

同付おなひより

同十年より肥前國より長崎より行くまりる

右みぎ之の節ふし

同十一年余とみけく 橋川大坂
此等約職と記と心

同十六年浪五傳下り新
丹波守り河と

包助

佐助 今郎左衛門

寛永九年より

將軍家より決りてくまらる

同十六年歩行のりらと記

助政

友一肥

寛永十七年

將軍家より湯一きくまらる

近祐

檀丸為 又右為

寛永二年

台徳院殿より此へ

同四年乃冬西丸御書

桶村源九郎本造

あ人と害せん

より川退く桶村

追くえんと

桶村と

台徳院殿より此回と感

似地と下
同十

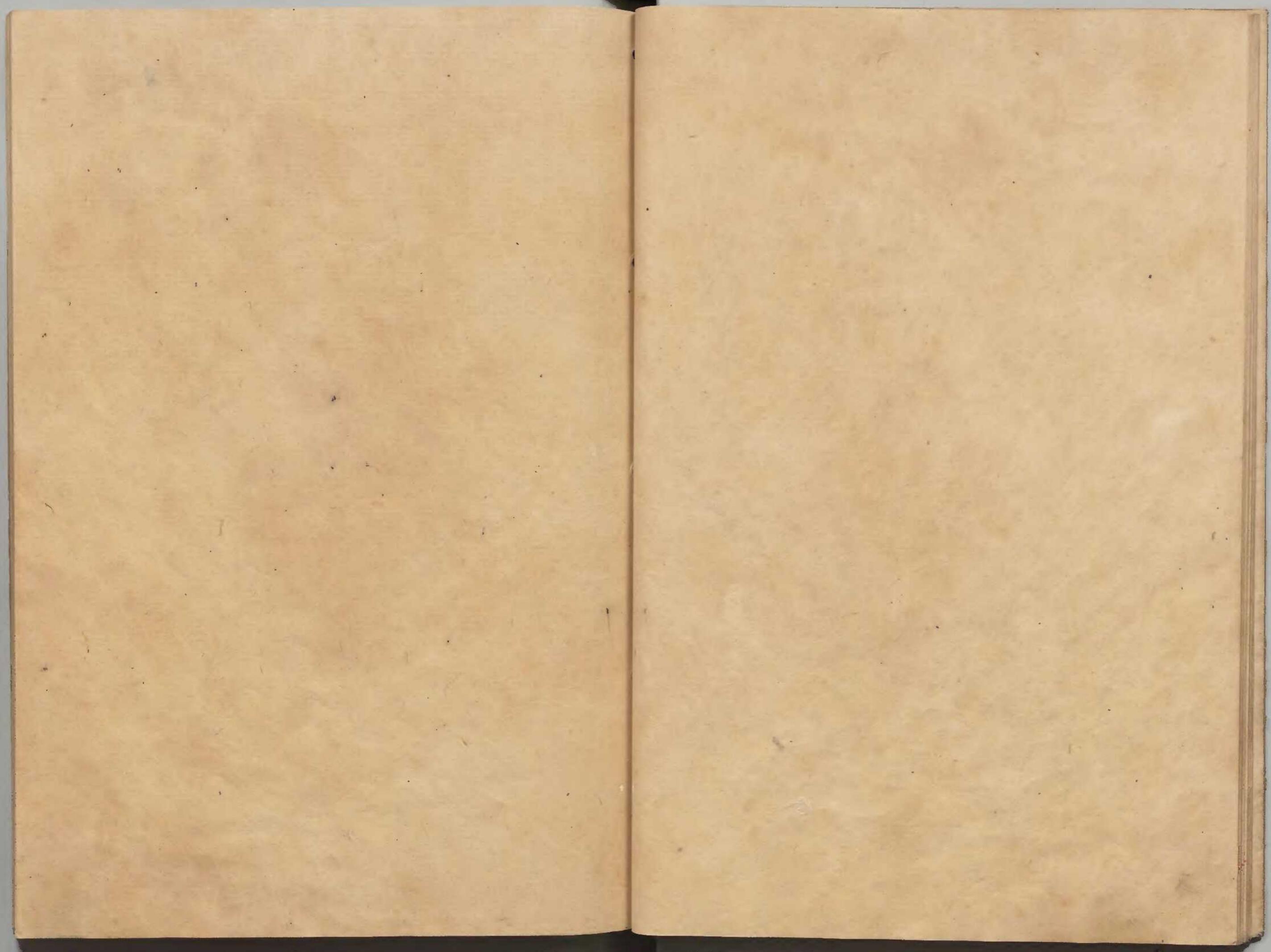
將軍殿より此へ

表に致丸の角ふた

まほ義勝ら相に致とえ

之角に控へり

此



大権現より此へてそまうり之河一揆
此少き是海よりとひく母此為親父
大津伊織組より一冊場此様を
守取六十人乃内忠切といつと者七
人正勝もう乃内なりう乃ら
又東條一揆乃時も同伊織組少く
是山此様とまうり結下少く此の名
あり

元和二年九十回歳少く病死と

法名浄光

心次

善四郎 生國同家

参り長三年

大権現より湯よりまうり御腰物

素と法もじ

園子原御陣より法もじ

大坂御陣よりまうり御腰物

元和二年より

右徳院殿より以て之より大書
を以て之

寛永九年より

將軍家より以て之より大書
と以て之

同十二年六十二歳少く病死

法名崇巖

正台

右台邊 生國同好

参り長二年

大権現より湯より

園ヶ原御陣より

大坂御陣より

元和二年より

右徳院殿より以て之より

寛永元年

法名崇巖

將軍家より修久しゅうくより

同十八年二条御着みづかひより少く病30-1死

中一六十二 法名相運しやうん

正親しやうしん

七郎左衛門 生國武藏むさし

寛永二年より

將軍家より修久しゅうくより

壽と法名しやう

次正しやうじ

若河郎 生國武藏

元和五年

台徳院殿より湯ゆより

大御着と法名しやう

同九年より

將軍家より修久しゅうくより大

御着と法名しやう

勝心

二十部 生國同好

寛永十一年

為家

家次 致丸乃月一 編矢

某

南條 えぢ

伯耆國南條北流と云はし

因幡 いんぱん

小條 こぢょう 乃 の 五郎 ごらう 了 りょう 属 しゆ
いんぱん 乃 の 小條 こぢょう 乃 の 五郎 ごらう 了 りょう 属 しゆ
いんぱん 乃 の 小條 こぢょう 乃 の 五郎 ごらう 了 りょう 属 しゆ
いんぱん 乃 の 小條 こぢょう 乃 の 五郎 ごらう 了 りょう 属 しゆ

享長十八年河内東野よりい
れと歳十八 法名全真

則勝

帯刀 生國相換小田原

くすめは小條英信守りしは
ろのら

大権現をい

台徳院殿

の軍家よりいしは
下総常陸之國代官と
寛永五年二月よりいしは
法名春光

寛永五年二月よりいしは
法名春光

法名春光

則門

帯刀 生國同家

帯刀にありしは
おと後大河内全真よりいしは

武川忠明生ホの代官と改中じ

則保子

金工巫 生國武彦

寛永十五年より勘定仕役と改中じ

じ

家紋と藩の丸又鶴乃圖

南條

● 宗後 しゅうご

武部少輔 ぶべのすけ

生國伯耆 なみのくに

山源氏政行 やまげんじまさゆき

行ふ

法名一行 ほうなまいつぎょう

隆秀 りゅうしゅう

武部少輔

生國相模 なみのくにさか

小條氏政り清ふ

法名ら一雲うん

澄政しんせい

十歳 生國同家

安永十九年

名徳院殿り存た湯た一ききくりり後ご

為な家か一り清し守しりり大坂お小こ赴して

材木ま守し切きとと清し守しじ

寛永五年大坂お一りととひく死しと

法名り善洞ぜんどう

澄次しんじ

生國同家

政友せいとも

小葉こ生國し武藏ぶさう

寛永七年

為家な一り湯た一ききくりり

同十二年より大御書とつとむ

家^い此^え級^ち丸^らの内^みよ^こと^ま呼^よ乃^こ蝶^ま

版い塙た

●
總す重け

岩い部は少の補せ

生き國こ下の野の依よ地ち

長ち七しち年ねん下のりり中ちゆう多た依よ波は守しゆを

〇〇〇

大おほ権ごん現げん下の依よ地ち大おほ坂さか御ご

陣ちん此こゝ時とき大おほ炊い以もつ總す下の一いっ所しよ一いっ所しよ

六十八歳少く病死

忠重

建次郎 生國同家

享長八年十二歳少く喜山周備守

ともしく

台徳院殿より清久より大坂内陣

乃時弁大炊以継り属一侍

登^り御陣より^り御物継り

属と

元和二年

台徳院殿此^ん釣命と^かり少^く忠長^の小

治^し久^く十九歳少く病死

忠重

建次郎 生國武藏守

寛永十一年より

將軍あり清久より侍

家此級二
九曜星く
添紋の
遠栢序
云
人
云
云

正勝

原本

物有

生國後河

今川義元いまがわのりよりしんなるのちしん列れつ

了りょうおおももじじきき愛あ治じ小こ大だい膳ぜんよりより之これくく

英えい法ぽう福ふく此こゝ時とき代しろよりより之これくく

天正十八年てんしやうじはちやうねん小田原陣こゝだはらじん此こゝ時とき付つ記き

法名宗忠

正連

高師右衛門 兼 生 兼 信 法

兼 治 小 左 膳 領 地 と あり ため ぐ と 野 々

お じ へ ぐ 時 正 連 二 歳 小 ぐ 是 一 考 じ ぶ

考 じ 長 七 年 小 大 膳 兩 領 と 没 收 せ ら 家

同 年 正 連 一 一 考 じ 考 じ

大 権 現 一 考 じ 考 じ 考 じ 考 じ 考 じ

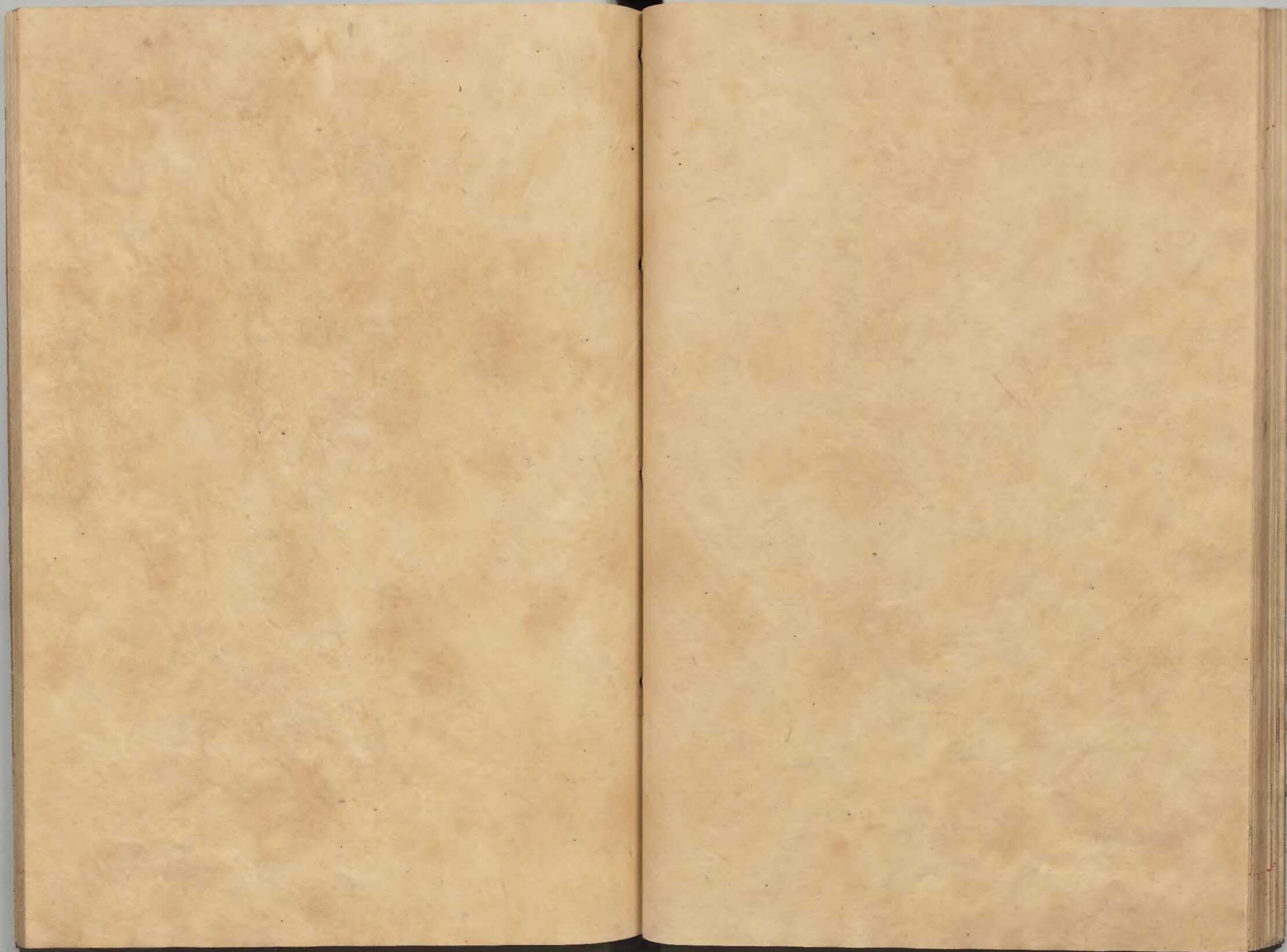
珠 壽 と 治 中 じ

寛 永 十 七 年

将 軍 家 此 考 じ 考 じ 考 じ 考 じ 考 じ

考 じ 考 じ 考 じ 考 じ 考 じ

家 此 段 九 の 月 二 辨 形



之原 ふもと

● 集

むらこのむら
古庫助 むらこのむら
生園信濃 むらこのむら
むらこのむら
武田信虎 むらこのむら

守台 もりだい

古庫助 生園同前

之史
信玄とハ勝頼よりつよ

台浦

惣右衛門 生國同前

くしめ道田右衛門を更より信玄

大権現甲川御入出此時軍田あり

取よ園ヶ原御陣よりかきかたはせ

大坂御陣よりかきかたはせ

より信

台渡院殿より信より

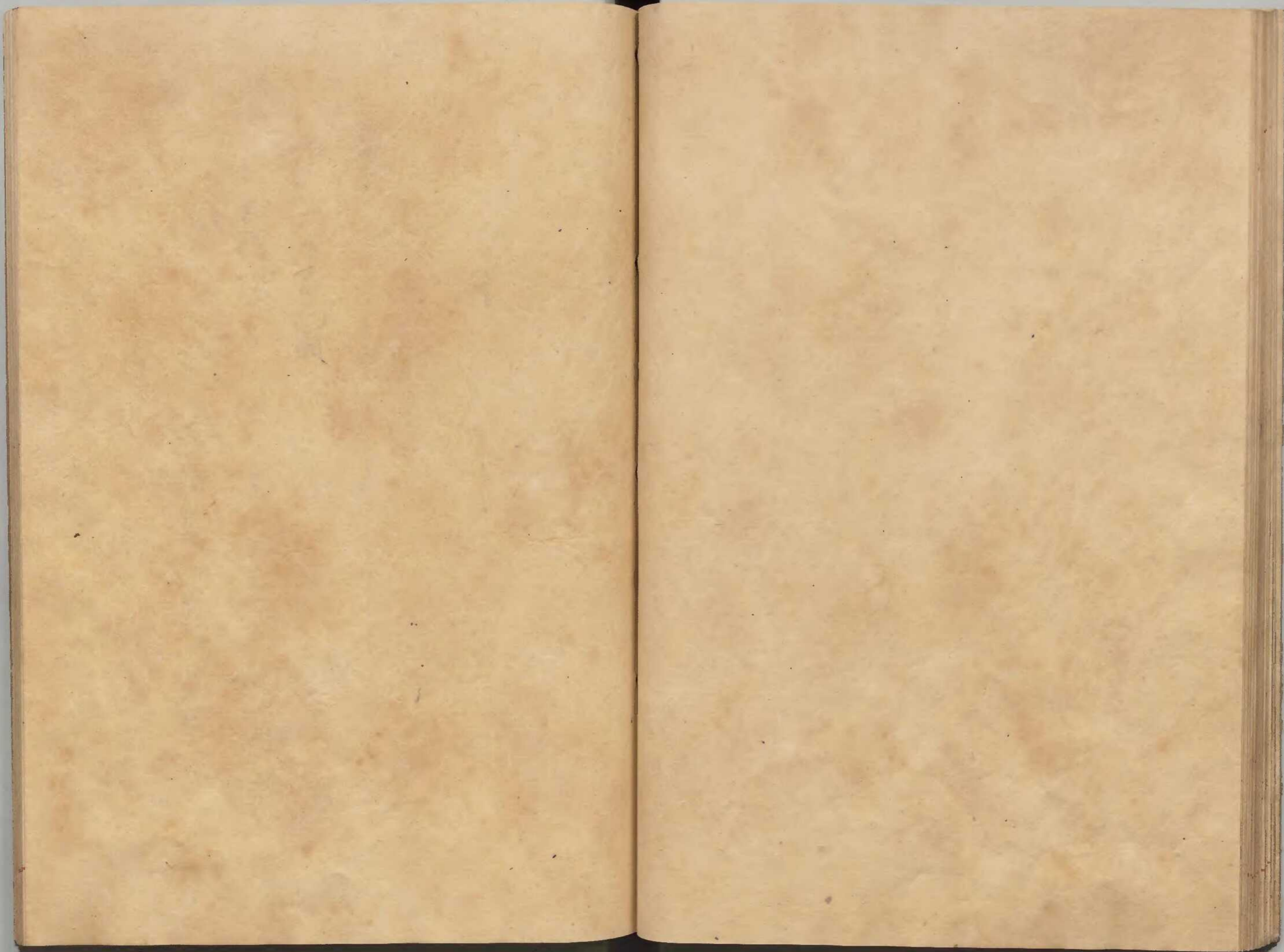
台里

惣右衛門 生國同前

台渡院殿

信軍より信より

家此段之隣取



之井 ちのい

● 某

十右衛門尉

大権現より侍之きましくまがり

勅命 ちうめい

よりよりく井伊守部が補直政 おのぶのまこと

とさふ

天正十二年四月九日尾刈長久手 おし

合戦あはれの事ことは、討死うちしの事ことは、二十六
後のち興おこ道みち本もとと号なづす

台正たいせい

左ひだり為な法ほ后ご五ご位い下げ 生せい國こく甲けつ斐ひ

大だい権けん現げんををしし

台たい德とく院いん殿でんのの侍しやく人にんのの事こと

寛かん永えい二に年ねん五ご月げつ廿にじゅう九く日にち 卒すつすす

四よ十じゅう二に 祐ゆう賀が道みち徹てつと号なづす

台次たいじ

市いち花はな 生せい國こく後ご河が

台たい德とく院いん殿でんのの侍しやく人にんのの事こと

台たい正せい院いん殿でんのの侍しやく人にんのの事こと

台久たいきゅう

生せい國こく同どう家か

台たい正せい院いん殿でんのの侍しやく人にんのの事こと

二
久
家
紋
口
月
結
の
中
心

佐治さぢ

● 集

新右衛門 生國なまこく 甲賀かへ

大権現おほいけんげん とよび

右衛門殿

右衛門殿より送るしるし

寛永七年六月十六日一病死

次

新右衛門 生國武藏江戶

大権現とてい

台徳院殿

為家より後へてい

家北院殿

集

橋局

一、めは富氏とみうぢなり丹後國えごのくに三本
 此珠このたまよりしこめる来こめたるため
 編富氏へんとみうぢと名
 七十二歳しじふにまい少く死しと 法名ほふな龍りゆう仙せん

秘術ひじゆつと伝ふ

同年

白鹿院殿より湯ゆ〜〜〜〜〜ゆの

秘術ひじゆつと伝ふ

享長十六年二月六日六十一歳少く

病死びやうじ 信名一夢

重しづ

後河守ごがのり 生國同家

寛永十四年十一月七日ひらより 病死びやうじ

七十二歳ななじふに 信名しん 英鉄えい

心重しんじゆう

新長文 生國同家

享長十一年きやう〜〜〜

白鹿院殿より湯ゆ〜〜〜

同十八年どうと信國しんよりこをひくこ 信地

を〜〜

？ 後 留 書 文 二 五 二 日 二

台 座 院 殿 御 感 悟 あり

元 和 元 年 同 心 十 人 あ っ け ら れ

同十九年大坂御陣より徳吉時小
治とつけし向りく備前迄より
大筒の鉄炮をよび石火矢等とあり
て陣中へよみちらくうよをひく
陣中矢倉なるいり陣屋おほ
打破新あり陣中れあとも騒
動と

大坂御陣より徳吉時

同七年涉上河は徳吉時外或し
日光御社衆ありいしは徳吉時
悔意なく是を治とじ

同九年二月七日より病死歳年八

法名宗鏡

聖賢

徳吉時 生國武蔵

元和六年しどろく

台漣殿より流るる

同九年又たき跡しる

寛永三年御入海北河供

同十一年御之海は供事ありし

日光御社系ありし御尊持は

河をこす

同二十年正月五日

お家下総國牛嶋より御尊持の

高田川北御館

北御館は御館あり

還流の時

堤の東より白鳥北群里ありし

時より壱貫をのり流地をう

このうらまの石を遊を花

石をうらまの壱貫は

もつゆりすみやふを

勢をわく石と驚うら

ららとひあふ家事二丈系なり壱貫

流地と較くあやま

虫之

新八郎

虫良

新八郎

家の級編り
子

● 重次 きり

編富

中ノ井尾氏なり きり 重次知少ナリ
編富 いひ 重次 きり 知少 きり ナリ
と い 重次 きり 知少 きり ナリ

文政 生園丹後

文政長十六年

大権現と称しといてくまの川

同午御切米とうまたまふ

同十九年大坂御陣より徳家

翌年御陣よりもちていふ

元和二年

右徳院殿より湯きくまつり武か州

の月りとひく徳地とたまふ

同二年より寛永九年り

りりり

右徳院殿御と湯ありひく日光山御社と

系ありひく湯御持徳家留これと

あひ徳と心

同九年同心十人とあひり

寛永四年と徳園れ内りとひく

徳地とくけくたまふ

同十年十二月廿二日りぬと歳

同十七徳名宝山道樹

● 宗定 しゅうてい

川口 かわぐち

帯刀 おび 生園 なまの 尾張 おわり

信長 のぶなが 了 りょう 浦子 うらこ

天正元年八月七十四歳小一

く 死 し

宗吉

文助 生國同家

信長より信之十人共州治人の内あり

天正十年二月六十一歳小一く

死す

宗清

久助 生國同家

信長より信之より大納言あり其後
秀吉より信之より大納言あり
石田治平少輔及逆井長政領とめ
一あけらば

大権現より松平法興より一あつあ

つと國列より船事一五子其後

右徳院殿の御免とかりあり

より信之より

天正十七年二月六十五歳あり

死に法名淨り

宗^子法^二

源作 生必回あ

台徳院殿より法へくくまらる

長十九年七月二十二歳

死に法名祐会

宗^子重^一

茂右衛門 生必回あ

長十一年より

台徳院殿より法へくくまらる

同十九年此冬大坂御陣此少き

喜山伯耆守領り属一法を

翌年此夏大坂御陣の節又喜山

伯耆守領り属一法を五月七日

天皇寺をくくりたるひく合戦

とら乃時伯耆守下知りたる

ひく細中よめく一夜は馬と宗
入宗重馬らり飛くとり歌一人を
うらとる家甲士りあらしはまけ
まふ
ま首とやうすけとき今村侍
御井右衛門人やくとせさしり
くけ神とみ宗重今村よじひ
我先無とせんとおふ好へり
ま首とやうすけとつりは時宗重
馬と池り事甚急ふく下
く下

今いふ事あらしとて故よ宗重馬
ともめら身ふて襟入る
御着守從中とあつめく
きをやふ宗重りよと今村
御井がみ家こころとこもた
けり御着守

右徳院殿より云とく宗重が御
とあけとるは同一とては後
戸りといく大坂夏陣は事

とさるる所建地一倍と此所加増と下
一之海の家

寛永九年より

將軍家より此へとくまの所家

同年八月迄とくつひんより所使書

此没と此中と

同十二年此地一倍と此所加増と

存順と

宗次よす

久助 生國うぶくに山城

寛永十九年十月

右徳院殿より湯とくとより

治ちりりくくに父宗徳ちちむねのりの家督いけさくと此

元和七年五月より所書院書と

此中

寛永九年正月より

將軍家より此へとくとより所小姓こせう

継代高と治やじ

同十六年七月治よりらく小姓
治の継かーらと好る

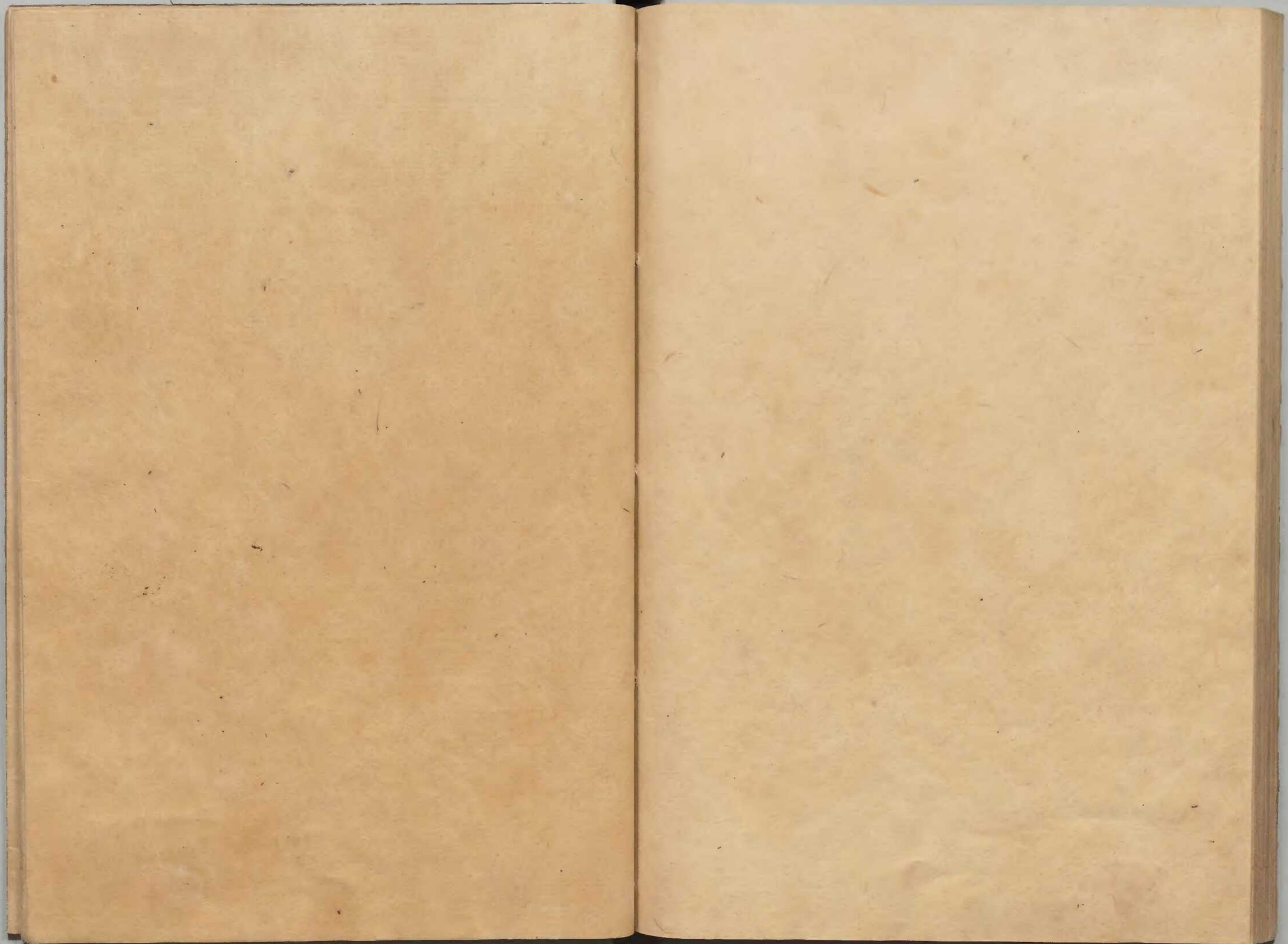
宗世

十二郎生國武藏

寛永元年五月より

將軍家より治よりと好る

家此紋圖の内蔵為



川口合宿の村やーなひく子と
是より川口氏とをいふ

大権現より信くくくく
去又長五年 園ヶ原陣より信
うのくち

右徳院殿より信くくくく
河陣より信

元和五年六月十二日武列江戸
いとひく病死也ー 四十六

武ま心こころ

長之部

右徳院殿より信くくくく
河陣より信

寛永十七年二月十九日江戸
いとひく病死也ー 四十六

正位

源重尉

寛永九年

三月

將軍家一存渴

~~~~~

家北級目録

● 泰保 ちへう

松下 かした

右邊尉 右邊尉 右邊尉 い 右邊尉 い 右邊尉 い  
宇多天皇十二代なり

長保 ちやうほう

右邊尉



國繼こくに

源五郎

長範ちがのり

源左衛門

為重むねしげ

友六郎

高俊たかとし

右近衛うねのちか 監

法名りやうな 同秋とあき

近次ちか

長二郎

